

像を絶していた。
同じ避難所でも、被害が全くなかった人、電気が止まっただけの人、自宅が床上浸水した人、自宅を流された人、家族や身内を失った人、それぞれ被災者でも被害の差があり、対応の難しさも強く感じた。

今後の活動

これから寒くなり冬になるにつれて、個々の仮設住宅に入居している被災者の自殺が増える可能性がある。1人の自殺者もださないために、仮設住宅にいる被災者に対して、孤立させることのないよう交流の場を設けていきたい。行政も復興に向けてがんばっているが、個々の1人ひとりに対応していくためには、ボランティアの力が必要になってくると思う。

今後は、自然と共存した地域づくりをしていきたい。三陸から、世界のモデル地域になる1つのビジョンを作りあげていきたいとも思っている。自然エネルギーだけではなく、暮らし方を変えていかなければいけない。50年先、100年先の未来に、

子ども達にどういふものを残せるか、今回の震災を契機にきちんと向き合っていかなければ、二度とチャンスはないと思っている。

震災を振り返り

正直、振り返る状態ではない。マスコミの震災に関する報道も減ってきた。ボランティアの数も減っている。常時240-250人はいるが、夏休みに入った今でもボランティアは足りていない状況である。運営しているスタッフの人材育成も課題のひとつだ。

まごごろネットを立ち上げる時、「最低5年は活動をしていかなければならない。長期戦になる」と申し合わせた。ボランティアは減少し、被災者は孤立化する。これからが正念場を迎えると思っている。動き続けながら、失敗しながら、ベストではないかもしれないが、最良を目指して活動している。

市民レベルのネットワークづくりの重要性を今回改めて強く認識した。

個人

盛岡市

つながりと信頼関係と多くの善意で、不可能が可能に。

石田 朋子 Moonbow 地域資源プロデューサー、わわプロジェクト岩手エリア プロジェクトリーダー

取材日 2011.8.4

■ Moonbow

盛岡の地域資源の掘り起こしと魅力発信、コミュニティと人材育成に重点を置いた長期ビジョンのまちづくりに取り組む。

■ ソーシャルクリエイティブプラットフォーム わわプロジェクト

復興活動に取り組む人々と支援者を結ぶため、被災地域で活動する人との連携、活動拠点の整備、新聞・Web-Site を活用した地域情報の発信を行う。

3月11日 14時46分

盛岡の自宅の仕事をしていた。これから出かけようと思った時に、今まで体験したことのない大きな揺れを感じた。家族と近所の人々の安否確認をした後、ラジオを確認しながらすぐに車で携帯充電器、電池、ガスコンロのガス、保存食を買いに出かけた。いち早く行動したので、並ぶことなく購入することができた。

翌日は自転車関係先の安否確認、県庁・市役所での情報収集に奔走した。盛岡市内はいつも見る住み慣れた町の光景ではなかった。車が少なく、空気が澄んでのんびりとしているようにも思えた。ライフラインは電気が2日目の夜に復

旧したので、(水道は途中半日断水したが3日目には復旧) テレビとインターネットから情報を収集、「何かをしなればならない」と翌日泊まり込みの準備をして出かけた。

「SAVE IWATE」結成

震災から2日後の3月13日、震災前からつながりのあった仲間と先輩方と一緒に東日本大震災被災地支援チーム「SAVE IWATE」を立ち上げた。中には3月12日から被災地に入り活動していた仲間もいた。

「SAVE IWATE」では1週間、ほぼ不眠不休で活動に取り組んだ。被災者名簿や現地状況をホー

ムページに掲載し、集めた情報を紙にして、物資や灯油等と共に被災地へ届けた。17日夜、現地に入っている仲間から緊急支援依頼があり、急遽仲間達とネットで支援を呼びかけた。日頃から懇意にいただいている『あさ開』さんが酒蔵を解放してくれた事もあり、翌日の昼には酒蔵いっぱい物資が集まり、2日間で5tトラック4台分の物資を被災地の人達に直接届けることができた。振り返ると、仲間達や共にまちづくり活動等してきた人達との震災前からのつながりと信頼関係、そして多くの皆さまの善意のお陰で不可能にも思えた事が可能になったのだと改めて感謝している。

被災地での活動

2週間目からは個人で被災地に入り、住環境整備や物資配給、弁護士相談の仲介、ニーズや被害状況調査等、必要に応じ臨機応変に活動した。物流はガソリンが入れば一気に回復するだろうとあまり深刻に考えなかったが、避難所の様子を目の当たりにし、被災者が落ち着いて住める場所を早く整える必要性を一番感じた。そのため、被災地に入り最初に行ったのが一般的にはあまり知られていなかった、応急仮設住宅(民間賃貸住宅の借り上げ)の推進である。民間賃貸住宅の借り上げは、県が2年間の家賃等を保証し、手続きした日から入居できるメリットのある制度だ。迅速に進むよう、役場に入って制度の説明や契約書等の作成、日本赤十字社や大手NGOが寄贈する家電製品等の手配に奔走した。

山田高校制服レスキュー

県立山田高校を訪れた際、先生から220名の生徒のうち約半数が被災し、44名の生徒が制服を失ったと伺った。そこで制服支援を行おうと盛岡の山田高校卒業生を中心に”やまだ応援隊”を結成し、制服購入募金を募った。「身体は動かないけど、皆さんの幸せを強く願っている事を伝えてください」「主婦の貯金からなので少しですが、お役に立てていただきたい」と多くの方から応援をいただき、さらに主旨に賛同した企業や国際NGOの支援もあり、制服を失った生徒全員に制服を贈ることができた。

今後の活動

現在参画している「わわプロジェクト」では、現地情報の収集と、新聞やWeb-Site等での情報発信を通じた現地とのコミュニケーション、被災地域の行政や社協、市民団体等のニーズと、それ



撮影：2011.3.27 物資配布

に応えられる方々や物、制度等とのマッチングなど必要に応じた活動をしている。

「お役に立ちたいが何をやって良いかわからない」「新しいプロジェクトを立ち上げたいがどうしたらいいかわからない」といった方々の仲介、手助けを継続的にしていきたいと思っている。また、震災当初は疎かになっていたが、今後は、今まで活動してきた盛岡のまちづくりや地域振興を大事にしながら、復興支援に関わっていきたい。

震災を振り返り

失ったものがとても大きく、正直未だに受け止められずにいる。お亡くなりになった方々に恥じめよう、犠牲を無駄にしないよう、高い志と未来に希望を持って、被災した人達と共に一歩一歩大事に築いていきたい。微力ながら自分もできるベストを尽くしたいと思っている。

また、今回の震災を通して『幸せ』『豊かさ』について考えさせられた。いつ実現するかはわからないが、原子力発電に依存するのではなく再生可能エネルギーでの持続可能な生活と、多義で豊かな社会を目指し、諦めずにアクションを起こしていきたい。

